

フランスにおける「写真術の誕生」とその現代的意義

大阪芸術大学 文芸学科 教授 青山 勝

【研究の目的（概要）】

本研究は、フランスにおける「写真術の誕生」の経緯をその技術的要素の実証的検証も踏まえて解明しつつ、他方でその現代的意義を多様な理論的アプローチで探ることを主な目的とする。これは、これまで私が行ってきたトルボット研究や2019年度に進めたニエプス研究の成果を踏まえて、それをさらに発展させようとしたものである。

【今年度の主な研究成果について】

今年度は特に、ニセフォール・ニエプス（1765—1833）による「世界最初の写真」の製法を文献的に再検証するとともに、その再現実験にむけて作業を進めた。

再現実験については、春からの新型コロナウイルスの拡大のため、版画家や写真家から専門的知見や技術の提供を受けることが困難となり、その計画の一部を変更せざるをえなかったものの、基本的な実験材料や道具・機材を整備し、予備的な実験を重ねることはできた。

そのような実験を踏まえて、今年度特に注力したのは、ニセフォール・ニエプスが1829年に執筆した「太陽印画法についての説明書(Notice sur l'héliographie)」

(以下「説明書」とする)を綿密に読み直し、その正確な日本語訳を作成する作業である。この「説明書」というまでもなく、ニエプスの発見＝発明した「太陽印画法」の実際を知る上で最重要の基礎文献のひとつである(héliographieの訳語としてはこれまで「ヘリオグラフィ」「エリオグラフィ」「ヘリオグラフィ」などが提案されてきたが、今回私は、この語のもつ語源的な意味合いを露出させるためにあえて「太陽印画法」と訳してみることにした)。

一般に「カメラを使って自然を写した現存する世界最初の写真」とされる《ル・グラの窓からの眺め》が撮影されたのは、1827年ごろと推定されている。現在テキサス州ハリー・ランソン・センターに所蔵されているこの写真がいったいどのように制作されたのかを知ろうとするとき、その最大の手がかりとなるのがこの「説明書」にほかならない。

これに先だってニエプスは1827年にも「太陽印画法」に関する短い「説明書」を執筆している。それを読むと、その1827年の段階(すなわち《眺め》が実際に撮影されていた段階)ですでに、「光の作用によって自動的に獲得」されるといった「太陽印画法」の根幹にかかわるさまざまな観念が出揃いつつあったことが分かる。とはいえ、ニエプスはこの段階ではまだその写真どのような物質を用いてどのような方法で得られたのかといった具体的な製法の詳細については一切記載していない。その「秘密」が明かされるのが1829年版の「説明書」である。この年、ニエプスはダゲール(1787-1851)と共同で写真の研究・開発を進める契約を交わした。この契約を遂行するために、ニエプスはその時点までに自ら進めていた写真製法の研究・開発の詳細をダゲールにはじめて開示したの

だった。

この1829年版の「説明書」を丁寧に読み解くと、
「現存する世界最初の写真」の製法を(内側から)辿り直すということであり、また同時に、現存しないがニエプスが制作したであろうさまざまな写真を具体的に思い描くための手がかりを得るということでもある。

「説明書」は、執筆から10年後の1839年、「ダゲレオタイプ」の製法の公開にあわせて出版された書物に——ダゲールによるいくつかの註釈とともに——収録され、広く世に知られることになった。しかし、近年のニエプス研究の成果によって、現在ではより正確なテキスト(オリジナルの手稿から書き起こしたもの)が容易に読めるようになっており、今回私は両者の細かな異同にも目を配りながら、精密にテキストの再検証を行った。

その際、現在進めている再現実験の作業は、しばしばテキストの正確な理解を促し、訳語の選択をより適切に方向づけてくれた。

以上の研究の具体的な成果はすでに、「ニセフォール・ニエプス『太陽印画法についての説明書』(1829年)——翻訳とコメント——」としてまとめており、大阪芸術大学大学院芸術研究科紀要『藝術文化研究』第25号、2021年2月に掲載される予定である。この成果を土台として、次年度はさらにニエプス研究を深く進展させていきたい。

【「ポリオラマ・パノプティック」について】

19世紀の大衆的な視覚的玩具のひとつ「ポリオラマ・パノプティック」は、ダゲールが1820年パリで開館したディオラマ館との関連でしばしば注目されてきた。この玩具の実物を今年度入手することができた。

この玩具と「ディオラマ」との関連はまだ十分に解明されているとは言いがたい。この玩具がディオラマ館でいわば「お土産」として販売されていたという記述もしばしば見受けられるが、この装置の発明は、1849年、ピエール・アンリ・アルマン・ルフォールによるものと考えられており、年代が合致しない。上記のエピソードは、後年作られたものと推測される。

とはいえ、その独特の視覚的効果を生み出す基本的な構造が「ディオラマ」と同一であることは間違いのない。「ポリオラマ」はおそらく、ダゲールのディオラマ館が19世紀ヨーロッパの人々に与えた大きなインパクトの余波の中で生まれてきたのであり、それゆえ「ポリオラマ」を研究することで私たちはそこから遡って、火災によっていまや完全に失われてしまったダゲールの「ディオラマ」の様相を——携帯可能な大きさに縮小されているとはいえ——ありありと脳裏に浮かべるための手がかりを得ることができるであろう。より詳細な検討を今後さらに進めていきたい。